

「赤襟—さんでは、年期が長い、仇な年増にや、間夫が有る」

「あての合方、張店で火鉢を引寄せて、灰かきならし、火箸をぐきつと突きして、でぼちんのせて、思案らしい顔をしてると、表にわたいの聲がするので、好きな男の聲する時は、蝶々の筭抜けて出る、チョットおちよやん、今表を唄うとをて、通るのん、松ちやんと違ふか、これお、やんと云ふのに、まあ、不景氣な、この娘わいな、寝とぼけて、頭をがし、かいてからに、手でかくのやない、筭でかきんか、それが爲に、筭があてがふたるのやないか、手でかいて、着物で拭くよつてに、何時も、髪結びさんの梳子みたいに、其處らが油だらけやがな、早う行きんかいな、おちよやんと云ふのに、辛氣臭なつて、自分が、庭へ飛び降りると、下駄が無い、草履と高下駄と、片跛に履いて、ガタボソ、と、表へ出て、チョット、松ちやんやないか、なんで内の表を素通りするねん、一遍くるつと廻つて来るねん、廻つて来るやない、久し振りに來たのに、なんですつと上つてやないね、今日俺錢が無いで、又あんな無理云ふ、何時でも錢が無いから、すつと上るくせに、今日に限つて其様な根性悪い事を、云はいでも宜いやないか、ついぞあなたに、錢が無い依つてにと云ふて、恥をかゝした事が有るか、サア早う上り、あんじようするよつてに、サアえ、早う上り上り上り」

「モシそんな無茶をしな、あんないなあたいの横腹を突いて痛いかな、モシ」

「上り」と云はれて、二階へ上つて、部屋を開けると水屋が有つて、江戸火鉢が置いてある前に大きな座蒲團が敷いてある、其の上え、でんと座ると、マア松ちやん、どないにしてやつたんや、えらい久し振りやしなア、これおちよやん、此の筭を、おぼはん處へ持つて行てあんじよう、しとをいで、おちよぼが筭を持つて表へ飛んで出ますと、暫くして此の筭で、一兩借つて來ます、其の内から一朱だけ残して、サアおちよやん此金張場へ渡しとくれ、残した一朱を紙に包んで、サアお、やんこれ松ちやんに、禮を云ひまんねんで、これお、やんと云ふたら松ちやんに禮を云ひや、モシ貴郎何と聞いている、自分の筭を質に置いて、こしらへた錢を、松ちやんに禮を言ひやと、モシ一寸此方むきなはれ」

「モシ人の耳を引張て痛いかな——」

「チョット、話に身が入つて貴郎の耳を借つたんや」

「何をしなはるね、けつたいな人やなあ」

「松ちやん、どないにして、やつたんや、何うの、彼うの有るか、酒五十本程爛をして、茶碗蒸しを百程言ふといで、松ちやん茶碗蒸しの百も何するね。何する、茶碗蒸しで行水が出来るか、食べるね。食べるのんは解つたアるが、百も食べられへんがな、食べられなんだら、店の朋輩に食べて貰へ、朋輩かてそないに食べられへん、そんなら近所へ配つといで、茶碗蒸しの施行や、マア松